シンポジウム「ホスティング方式での学校動物飼育」
―仕組みとメリット・問題点―

（2020 年度科研研究「持続可能な学校動物飼育プログラムの開発と評価―ホスティング方式の構築と効果検証」より）

中島　由佳

学校での動物飼育は，動物や他者への共感性を育み学校適応を向上させる等の効果を持つことが報告されている（中島，2020）．しかし鳥インフルエンザ流行後，小学校で飼育される鳥・哺乳動物の割合は減少している（図１）．減少の原因には長期休業中の

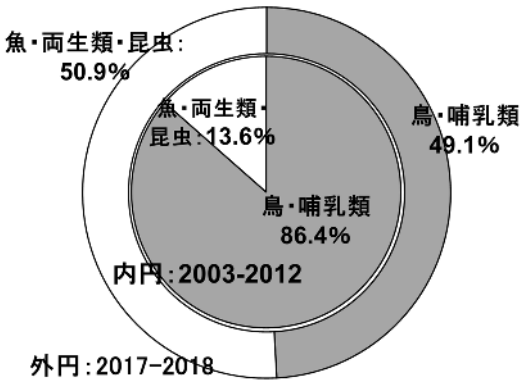

図１　鳥・哺乳類と魚・両生類等との比率（中島(2020)より）

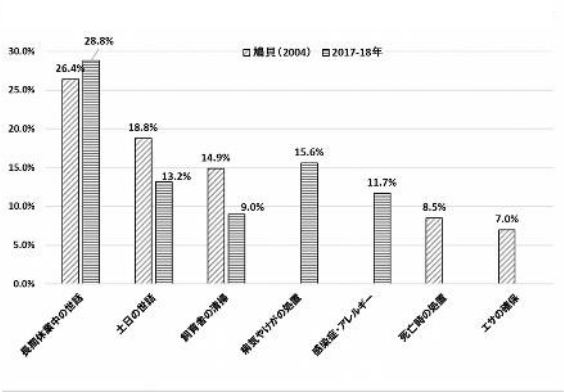

図２　「飼育における困難さ」の回答の比率（中島(2020)より）

飼育における教員への負担増大やアレルギーへの不安なども大きく（図２），教職員の努力に頼る現在の学校動物飼育は限界に来ていると言わざるを得ない．コロナ禍を始めとする外的影響と相俟って，学校での動物飼育を取り巻く環境は厳しさを増している．

緊急事態宣言による臨時休業を含めてのコロナ禍が小学校での動物飼育に与えた影響を調査した中島（2022）においても，現在飼育している動物がいなくなったのちの飼育継続について，鳥・哺乳類を飼う小学校の半数以上が「わからない」との回答を寄せている（図３）．子どもに学校動物飼育は必要かとの問いに対し，半数以上の小学校が必要と答えつつも「必要だが難しい」との意見も多く寄せられた（図４）．しかし一方で，過半数の小学校が「長期休業中に獣医師が預かる仕組みがあれば利用したい」との想いを抱いている（図５）ことも報告

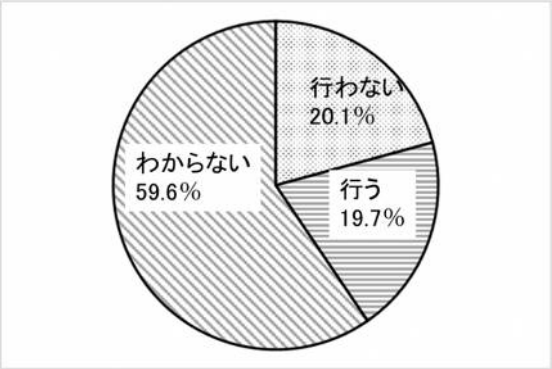

図３　現在の飼育動物死亡後も飼育（中島(2022)より改編）

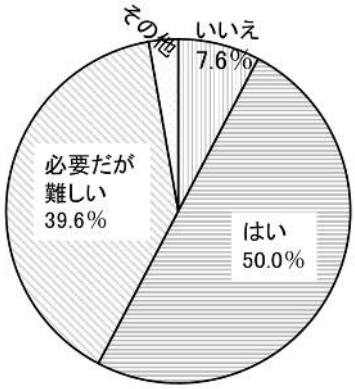

図４　子どもに学校動物飼育は必要か（中島(2022)より改編）

されている．

学校動物飼育が置かれたこのような状況を受け，2020 年度科研研究「持続可能な学校動物飼育プログラムの開発と評価―ホスティング方式の構築と効果検証」では，「持続可能な学校動物飼育」の一つの仕組

みとして「学校動物ホスティング（貸与）方式」を立ち上げ，各地域の小学校の協力を得つつ推進している．ホスティング飼育の特徴は，学校での動物飼育において，３連休を含む長期休業中に獣医師が学校動物を預かる方式であり，小学校での飼育負担の軽減を図る．また，

① ホスティング型の飼育により得られる児童への心理的効果の検証，

② 動物飼育を組み込んだ教科領域，単元における教育プログラムの開発と評価

を行うことで，今後の学校動物飼育のあり方を検証することを目的としている．導入前に研究者・獣医師・小学校間で，どの教科領域・単元で動物飼育を活用し，どのような教育的ねらいを定めるか協議し，ホスティング方式飼育を開始した．

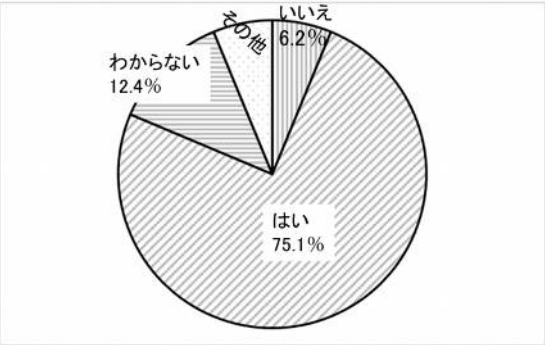

図５　長期休業中の預かり利用を希望？（中島(2022)より改編）

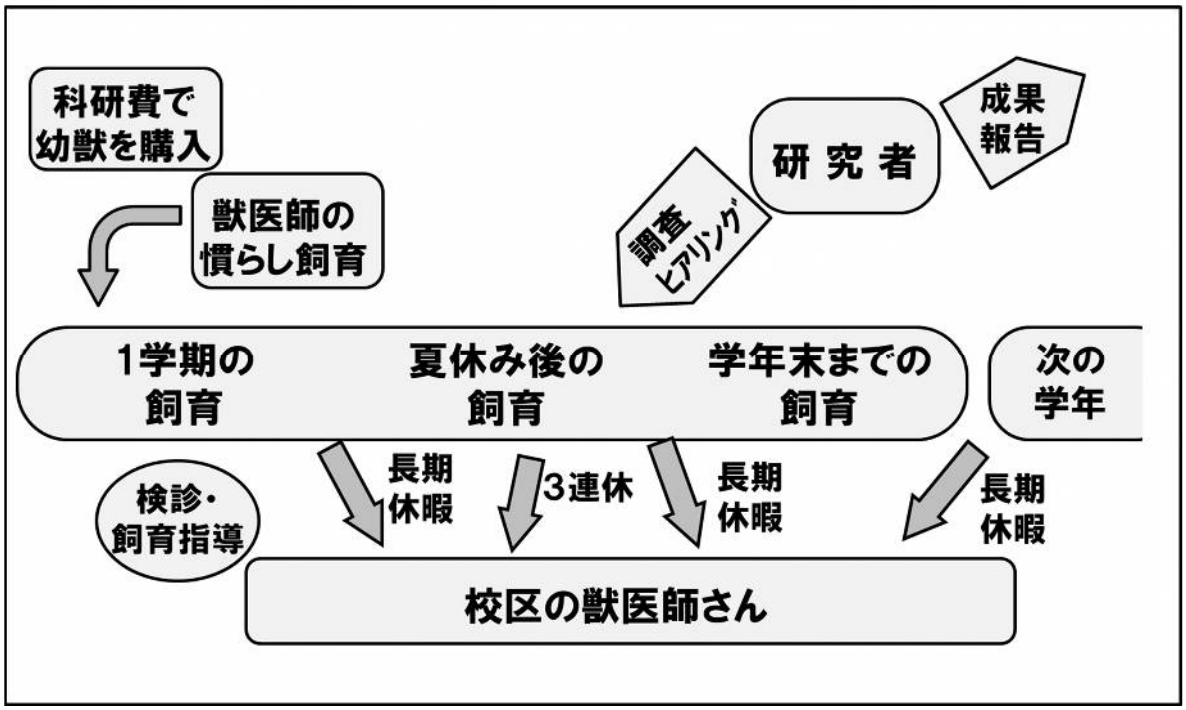

図６　学校動物ホスティング方式のモデルケース

ホスティング飼育の実際

ホスティング方式のモデルケースを図６に示す．生活科における動物飼育に焦点づけ，ホスティング飼育を行う対象学年は２年生，飼育動物はアレルギー反応を誘発することが少なく低学年の児童にも扱いが容易とされるモルモットとした．科学研究費の予算により幼獣を購入し，校区の獣医師が幼獣の慣らし飼育を行ったのち，小学校が校区の獣医師から動物を借り入れる形で飼育を開始した．動物導入にあたっては受け入れる小学校の行事・都合を最優先した．小学校では獣医師の飼育指導・管理を受けつつ，児童が主体となって継続的に動物飼育を行う．長期休業中は獣医師の下で動物を管理し，新学期の開始とともにホスティング飼育が再開される．約１年間の飼育の後，次の学年にモルモットは引き継がれ，新２年生がホスティング飼育を継続する．飼育空間は，天候不順や猛暑等にも対応でき，児童が親しんだり世話をしやすく，給食の配膳やアレルギーを持つ児童の導線にも配慮しうる持ち運び式のケージを採用した．

ホスティング飼育の効果の計測

児童の心理的発達を検討するため，飼育

前，飼育中，飼育終了後に，児童および担当教員に簡単なアンケート調査を実施．また，生活科における飼育の成果として飼育に関する児童の作文，絵画等により，飼育に伴う成長を記録するようにした．調査の際には個人情報に十分な注意を払うよう留意した.

ホスティング飼育方式を行っての気づき

ホスティング方式での飼育研究を行ってより１学年が飼育を完了し，現在，２年度目の飼育がおこなわれている．ホスティング方式での飼育を行っての気づきを以下に記す.

①ホスティング飼育のメリット

１クラスの児童全員が飼育を体験し動物とのふれあいを経験ですることで，命の不思議さ・温かさや動物の成長を実感できること，動物飼育の大変さを知り工夫を身に着けること，友だちと協力して命を大切にする様子等が学校より報告されている．また生活科における絵日記等での動物描写の変化からも成長がうかがわれる．一方で，教職員の長期休業中の負担の軽減，動物愛護の担保においても計画における目的を一定以上果たしていると考えられる.

②ホスティング飼育の課題

教職員の長期休業中の負担は軽減した一方で，獣医師の長期休業中・３連休の飼育負担については考慮の余地がある．獣医師に預かり飼育を依頼するにあたっての予算の手当てもホスティング方式を推進していくうえでの課題と考えられる．また中島 (2022) でも報告されているように，コロナ禍を受けて学校動物飼育自体にためらいを感じる学校が多いことも学校動物飼育の継続を難しくする要因であると推察される.

③学校動物飼育を繋いでいくことの重要性

コロナ禍に伴い動物を飼う世帯も微増したとは言え，子どもたちが人間以外の哺乳類や鳥類と触れ合う機会は依然として乏しい（日本ペットフード協会， 2021)．犬や猫の室内飼いが進み，家庭の内外で動物と触れ合う機会がなかなかない近年の児童にとって，学校の動物は，命の不思議さ・温かさを実感できる貴重な機会であろう．一方で，家庭で飼われるペットに対しての我々の意識もバブル期以降変化したといわれる（中島，2015)．伴侶動物として命の重みをより意識するようになった現代において，学校動物に対しても，学校動物の命の重み，「病老死」への戸惑いや後悔がより重く感じられる状況となっている．また，教員の働き方の見直しの時代にあり，正規職員の不足や課外活動の外部活用の時代において，学校での動物飼育のあり方も，教員のみによる努力から外部の専門家や保護者の援助が重要となる．子どもが命の大切さ，生命の多様性を実感できる数少ない機会である動物飼育の今後の推進の工夫が求められる.

（大手前大学現代社会学部教授）

引用文献

鳩貝太郎 (2004)． 生命尊重の教育に関する調査結果と考察 生命尊重の態度育成に関わる生物教材の構成と評価に関する調査研究 （課題番号 13680219）．平成 13～15 年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究成果報告書 5-22.

中島由佳 (2015)． ひとと動物の絆の心理学 ナカニシヤ出版

中島由佳 (2020)． 鳥インフルエンザ後の学校動物飼育の実態調査および子どもの心理的発達への飼育の効果 （課題番号 20K02896)．日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）研究成果報告書

中島由佳 (2022)． 第１回緊急事態宣言に伴う小学校休業と学校動物飼育への影響 動物飼育と教育，*25*, 35-38.

日本ペットフード協会 (2021)． 令和３年全国犬猫飼育実態調査 https://petfood.or.jp/data/chart2021/index.html